

## 新しい地理教育への視点

——地図なくして地理学習はない——

安井 <sup>まもる</sup> 司\*

### I. 教育や学習をいかに考えるか

地理教育の課題については、これまでもいろいろな場や機会に語られてきた。もちろん内容の構成が基本であることはいうまでもない。しかし、根底にある教育や学習の意義を忘れてしまうと、理念と現実が食い違ってくる。

教育や学習で大切なことは、学習者の興味や関心、欲求を喚起し、やる気を起こすことである。私は教育の根底は「教育は共育なり」と考えている。

学習は、自らの問いや目標を持ち、経験を通して自らを変える意識的な活動である。

学習を適切に行うには、学習者の個性をつかみ、人間形成に必要な基礎・基本がしっかり身につくような指導観に立たなければならぬ。

平成4年度から小学校で実施された生活科に「遊び」という概念が取り入れられたことも、新しい指導観の一つである。

さきに提案された大島明先生の「地理で遊ぼう」は、この意味から高校や大学の指導においても面白い発想である。

「遊び」を辞書で調べると、“休ませる”“何もさせないでおく”という意味の他に、“遊学”というように“他国へ行って勉強する”

とか“旅行したりする”という意味がある。

建築家の安藤忠雄氏は、街づくりの構想で次のように述べている。「商店ばかりが並んでいる街へ出かけると、人間はたいへん疲れる。ところが、街に水や緑があると、人間は極めてリラックスし、憩いの気持になる。こうした街を“人にやさしい街”とよんでいる」と。

教育活動でも効率のみを追求していると、人間性が忘れられ勝ちになる。そこでゆとりを持ち余裕をつける意味で、学習に「遊び」の概念が取り入れられた。

目標に即して指導内容を構成したとき、指導者は教える内容をつかんでいるので、ストレートに教え込んでも不自然さを感じない。

しかし、経験や能力が低次元の段階にある学習者は、新しい内容であると既知の知識や理解ではストレートに解釈できない場合があり、結論をつかむまでに迂余曲折の認識過程が必要となる。この迂余曲折の過程を「遊び」ととらえてみるのはどうだろう。

「遊び」には、時間的なゆとりのほかに、内容的なひろがりや深さが含まれている。指導者が予定した一つの方法で学習を進めるのではなく、幾通りものコースを設け、学習者が納得して指導者の考えや学習のねらいに到達できるようなもくろみが必要である。

\* 四天王寺国際仏教大学

カルチャーとしての「遊び」には、①集団成立の契機、②学習者の自治的世界の成立、③創造性の発達という三つの意義があげられている。

新しい指導観として、①学習者が全身を使って学ぶ、②自らの力で知識や技術を獲得する、③生涯学習につながる、④学習成果を生かして、絶えず自己啓発に努める、などが考えられる。

「学ぶ」という言葉は「真似る」ということからきている。すばらしい中味を持っている名人や達人に教わると、その人に対峙しただけで何か感動するものを受け取ることができる。これこそプロの風格というものであろう。

名人や達人は、人間的にも修養を積んでいるので、謙虚で素直さを具えている。

学校の教師が専門職の仕事をしているとき、果してプロの風格を具備して教育指導に当たっているか、自責の念にかられる。

私は、定年退職後に私学に勤務したが、施設の設備や拡充もさることながら、講義内容の充実如何すなわち学校のレベルが、入試に集まる受験者数を左右していることをシビアに味わっている。

ところで、日本の教育は上からの要求で改革されがちであるが、今回の教育課程の改革にみられた「遊び」の概念などは、大学のカリキュラムの抜本的改革にも取り入れるべきであると考えている。

## II. 感性を育てることの大切さ

地理学や地理的分野の内容は、空間認識といわれ、時間認識や社会のメカニズムと共に

社会事象の考察には欠かすことのできない認識内容である。従って、教育内容から空間認識が欠落することはないと一般的に考えるが、今回の高校の地理歴史科の科目構成のように世界史A、Bのいずれかが必修、日本史A、B、地理A、Bのいずれかが選択履修になると、地理の履修が中学1～2年で事実上終る場合が出てくる。地理A、Bのいずれかの選択履修に魅力を感じさせるには、小・中・高・大を通じての地理学習、空間認識の必要性を喚起しなければならない。

これまでの地理学習では、生活舞台の上に展開する人間の姿が余りにも抽象化されて見えず、学習者に感動がにじみ出てこなかった一面がある。

教育で大切なことは、「自分の頭で考え、行動する」ことの回復である。現在の人間の頭脳はコンピューターに近く、既成のシステムに基づいてデータ処理をしているにすぎない。これからの社会で必要な能力はプランニングのできる能力であり、それには創造性と判断力が重要となる。

この能力を身につけるには、感覚によって呼び起こされ、それに支配される体験としての感性を育てなければならない。感性は生物全体社会に共通したもので、人間だけが別扱いされるものではない。すなわち、自然と共生、共存するものである。

空間認識を内容とする地理学習では、自然と人間の関係をつかむフィールドワークなどで、考え観察する内容は、まさに地理学習が培う能力にぴったりである。

こうした観点に立って、学習者に感動を与えるには、地理学習の内容を構築する視点として先ず次の7つを考えてみたい。

- ①目標や内容のとらえ方……指導者、教科書、の考えを絶対視して、画一的に詰め込み、覚えさせることに終始していないか。
- ②教材源、資料源の充実……教材のよしあしを常に吟味し、収集した資料を地球的課題に焦点化してきたか。
- ③学習環境の工夫……気楽に話し合い、協同して学習できる人間関係や物理的環境の整備に努めてきたか。
- ④学習者主体の学習過程……学習は学習者一人ひとりに成立するもので、学習の必要感や解決への見通しを配慮してきたか。
- ⑤効果的な学習活動……単調で陳腐な活動に陥っていなかったか、学習者自身による学習活動を取り入れてきたか。
- ⑥指導者からの適切な刺激……学習が深化、発展するよう、指導者の発問、助言、指示などを考えてきたか。
- ⑦評価機能の活用……人間のよしあしを定めたり、格付けしたりすることで、学習者の成長を阻害することはなかったか。

### Ⅲ. モノからヒトを中心の内容構成に

次に具体的な内容の柱として、「モノからヒト」を中心に、国際化の立場から考えることも重要なポイントである。

国際化については、自分の立脚している空間や国家をよく知り、その事情や立場を他の人々にアピールするとともに、相手の事情や存在をよく調べて理解すること、すなわち自己主張と異文化理解がその核になると考える。それには見知らぬ土地への関心、自然（生活舞台）と人間とのかかわりへの着目、地図の利用が大切である。

相手の立場を理解するには、歴史、文化、民族、宗教、政治などの異なる国を、全体として総合的に理解することを忘れてはならない。テレビの娯楽番組からは断片的、興味本位の知識しか入ってこないで、十分指導する必要がある。

総合的、包括的にとらえるとなると、重点的に対象圏を設定することもでてくる。アジア中心、学習者が関心を持ったり、将来行ってみたいと考えたりしている国を中心に取ることも考えられる。

さらに、第2次世界大戦、ベルリンの壁崩壊以後、世界は大きく変化していることを重視する必要がある。変化のスピードは、十年一昔といわれていた時代とは格段の差がある。地理学習は、こうした変化の内容を、統計や写真などの資料の更新だけで変化に対応できたと錯覚していた嫌いがある。地域構造の変化や世界の発想の変化を視点にすることを忘れてはならない。それは、学問の発展による新しい考え方の採用とも一致してこなければ魅力は生まれてこない。

例えば、産業別人口構成や産業別国内総生産の構成も、資源・産業重視から生活・文化重視に移行している。従って、それに対応する教材開発に力を入れなければならない。

高齢化社会を迎えて福祉の問題も大きな課題である。生涯教育の観点から地域コミュニティの形成にも関心が寄せられている。

これらの事象の地域性を考え、空間構造をとらえる内容を確立する必要がある。

要するに、人間の出てくる地理、社会や地域の変化に対応して、人間の営み、悩み、生き方などを、地域性解明の観点から教材化を図ってみるべきである。

その際、認識の対象のひろがりとして、グローバルなスケール、ゾーナルなスケール、ローカルなスケールのどの次元で考えるかをきめることも大切である。同心円の拡大といった単純な順序性だけでなく、どのスケールを中心に置いても他のスケールに着目させる配慮が求められる。特に国際化し、日本の位置づけが高まってきた以上、グローバルなスケールで空間構造を考える視点を忘れないようにすべきである。

小学校の身近な地域の指導においても、世界の典型的な国々との結びつきや比較をすることを、指導者の心構えとして持っていなければならない。現実動いている世界とむすびついた見方をする場合、学習者には常に臨場感の漂う感動が伴うものである。

系統地理か地誌かの問かけもある。等質地域としてとらえるとともに、構造的な地域の考察をすることも大事である。易から難という発達段階も、単純に割り切って配列してよいかどうか考えてみたい。

#### Ⅳ. 地図を重視した学習を

地理的事象は地図を通して理解を深めることが効果的である。地図には二つの意味がある。一つは学習活動の情報源として利用することであり、もう一つは物語として読むことである。

初心者にとって地図はなかなかとつきにくいのが、地図を作ることから始める。最初は正確でなくてもいいし、楽しい物語のある地図であってもよい。地図を作ることによって本当の地図に出会ったときの感動が生ずるかも知れない。地図には物語があることを自然

に知ることが大切である。

地図を作っていく過程で、作った時に正しくても、時間の経過するうちに変化があらわれ、多くの省略があることを知るようになる。その省略は、使う目的によって変わってくることもつかむようになる。

地図は作るとともに、読むという一面がある。読み方にも、実用的な読み方と物語としての読み方がある。地図上の位置、距離関係をふまえて、空間的拡がりのなかで情報を読みとることが実用的な読み方である。それに対して、水田に注ぐ小川でメダカやオタマジャクシをすくっていた思い出を想像したり、神社や寺院の存在から人々の葛藤を推量したり、地図を通して本と同じように物語を読むという読み方がある。後者において空間を駆けめぐる人間の動きを描いて楽しんでもらいたいものである。

これまでの地図は、メルカトルの地図が大きな影響を与えてきた。これからは、赤道を中心とした地図だけではなく、極中心、アジア中心といった多様な地図に接するように心掛けたい。また、表現するデータをクローズアップしたデフォルメされた地図も注目して利用していきたい。

#### Ⅴ. フィールドワークを積極的に

地理学は事実を確かめ、その存在をなぜかと追求していく帰納的な考え方を大切にしていくなことが強調されてきた。事実でないことを仮定で判断するのではなく、あくまでも事実をしっかりと確かめる態度を培うことを心掛けたい。従って、考える答えも一つでなく多様な答えが出てきてもよい。こうした場面設

定を基本にして、地理的思考、判断をしていくところに地理学の生きる道がある。

それにはアウト・ドアの学問として、可能な限り野外に出てフィールドワークを実施することを復活させたい。種々の制約があることは承知しているが、可能なところから実施する積極性が欲しい。学校五日制が完全実施されたとき、フィールドワークの基本が生か

されることを期待したい。

フィールドワークを通して、人間が自然といかに共存、共生しているかを体験することこそ、地球にやさしい人間形成に結びつき、空間構造を全体としてとらえる能力となる。

〔付記〕本報告は1992年度立命館地理学会大会シンポジウム「地理学は何を教えるべきか(1)——地理教育の現状と展望——」で報告した内容に加除修正したものである。